

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制（農薬使用基準等）等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。
■文中で旧 URL (<http://www.nougyou.kitakami.iwate.jp/agri/>) を記載している場合、新 URL (<http://i-agri.net>) に読み替えてください。

平成18年度病害虫発生予察情報 特殊報第1号

平成19年2月6日
岩手県病害虫防除所

キュウリ黒点根腐病（仮称）の発生について

1. 発生状況

- (1) 平成18年8月に岩手県一関市の自根栽培の露地キュウリ圃場（2圃場）で、地上部が萎凋し、根が褐変腐敗する症状が発生した。（写真1、2）
- (2) 被害株の根には、小黑点が多数形成されており、顕微鏡観察したところ、この小黑点は子のう殻で、子のう殻中には子のう胞子が多数確認された（写真3）。
- (3) 県農業研究センター病理昆虫研究室で診断したところ、本症状は、*Monosporascus cannonballus* によるキュウリ黒点根腐病（仮称）であると同定された。また、罹病根からの分離菌株をキュウリ幼苗へ接種したところ症状が再現され、病原菌が再分離された。
- (4) キュウリ黒点根腐病（仮称）は、国内での発生報告はないが、同じ病原菌によるメロン、スイカ等ウリ科作物における黒点根腐病が各地で確認されている。また、本県での本病原菌による被害は今回が初確認である。

2. 病徴と診断方法

- (1) 収穫期を迎えた頃から地上部にしおれ症状がみられ始め、発病初期には晴天の日中に萎凋し、朝夕や曇雨天には回復する。これを繰り返した後、急激に枯れ上がる。
- (2) 根は、初め細根が腐敗脱落し、残った根はアメ色に腐敗する。症状が進むと根上に直径0.3mm程度の小黑点（子のう殻）が形成され、これが診断に際して重要なポイントとなる（写真2）。この小黑点は、根端部に観察されることが多く、診断に際しては半径30cm程度の範囲の根を丁寧に集めることが望ましい。
- (3) 類似病害であるホモプシス根腐病は、症状が進むと根の表皮細胞には粉炭を塗ったような黒色の疑似菌核（黒色菌糸塊）が形成される点が異なり、区別できる（写真2右）。

3. 病原菌と伝染

- (1) 病原菌は、糸状菌の一種 *Monosporascus cannonballus* である。本病原菌はメロン、スイカ等のウリ科作物を特異的に侵す。
- (2) 病原菌は被害植物の根部残渣とともに土壌中に長期間残存し、伝染源となる。

4. 防除対策

- (1) 土壌の過湿や乾燥を避け、根の成長を促進し被害の軽減を図る。
- (2) 被害株は早期に抜き取り焼却処分する。また、作付け終了後は直ちに耕起する（耕起によって根が土壌表面に押し上げられることで、急激な脱水が起こり病原菌の増殖が抑制されるため）。
- (3) 本病の発生した圃場の耕起、整地を行った管理作業機は、そのまま無病圃場に使用すると付着した土壌によって無病圃場も本病に汚染される恐れがあるので、作業機に付着した土壌は丁寧に洗い落とす。

5. その他

- (1) 現在のところ、本病の発生確認は自根栽培のキュウリのみである。
- (2) スイカの事例ではあるが、カボチャ台木は黒点根腐病に耐病性があるという報告がある。



写真1 キュウリ黒点根腐病（仮称）による萎凋症状発生圃場



写真2 キュウリ根上に形成された直径0.3mm程度の
小黑点(小黑点=子のう殻、肉眼で確認できる)



(右写真) ホモプシス根腐病によって
根に形成された疑似菌核

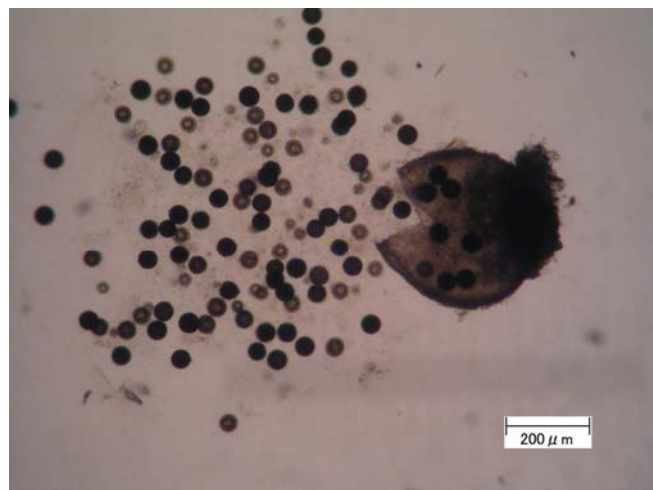


写真3 押しつぶされた子のう殻と、子のう殻から放出された子のう胞子（顕微鏡観察）

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】

TEL 0197(68)4427 FAX (68)4316

※この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

アドレス <http://www.nougyou.kitakami.iwate.jp/>

農薬使用の際には ①使用基準の遵守 ②飛散防止 ③防除実績の記帳 を徹底しましょう